



日本イスパニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第28号 (2021年10月1日) / Núm. 28 (1 de octubre de 2021)

日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-24-1-4F
 (株)ガリレオ 学会業務情報化センター内
 Tel: 03-5981-9824 Fax: 03-5981-9852
 e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp
 (<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

広報委員会「会報」編集部

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
 立命館大学産業社会学部
 仲井邦佳 宛
 Tel: 075-466-3148
 e-mail: knakai@ss.ritsumei.ac.jp

目 次

【巻 頭 言】

- 三好準之助 私とアメリカスペイン語…………… 2

【追 悼】

1. 福嶋教隆 出口厚実先生とスペイン語学…………… 3
 2. 山村ひろみ 田村美代子先生…………… 5
 3. 加藤伸吾 小林一宏先生へ…………… 6

【エッセイ】

1. 二宮 哲 数えられる、数えられない、数えない…………… 8
 2. 志波彩子 スペイン語と古代日本語の対照：
 se 中動態（再帰構文）とラレル構文…………… 9
 3. 葛原 亮 エッセイが書けない…………… 12
 4. 嘉幡 茂 盗掘者？：存在しない「ピラミッド」で発掘する考古学者…………… 13

【書 評】

1. 成田瑞穂 Yoko Ikuno, *Mimesis: diccionario bilingüe japonés-español del uso de onomatopeyas* (Liberas Press, 2021)…………… 16
 2. Saori KOBASHI Yuko Morimoto, *Los artículos del español en contraste* (Arco/Libros, 2021)…………… 17
 3. 小阪知弘 岩根罔和『ドン・キホーテのスペイン社会史』(彩流社、2020年) …… 19
 4. 安原瑛治 パウリーナ・フローレス『恥さらし』
 (松本健二訳、白水社、2021年)…………… 20

【新刊書紹介】

- 鼓 宗 ラテンアメリカ文化事典編集委員会 (編)
 『ラテンアメリカ文化事典』(丸善出版、2021年)…………… 21

【国際研究プロジェクト案内】

- 棚瀬あずさ キャラバンは進む ―国際研究プロジェクト
 『ダリーオ十年紀』(AR.DOC)の現在…………… 23

【新刊案内】(2020年6月～2021年5月)…………… 25

【2021年度日本イスパニヤ学会奨励賞】…………… 28

【『HISPÁNICA』編集委員会より】…………… 28

【編集後記】…………… 28

【巻頭言】

私とアメリカスペイン語

三好 準之助

会報 28 号の巻頭言を書かないかというお誘いを受けました。木村会長のご発案だそうです。私は昨年度（2020 年）の大会で記念講演をさせてもらいましたが、テーマは拙著『南北アメリカ・スペイン語辞典』でした。そのときの私のアメリカスペイン語研究の話が興味を引いたことからのお誘いです。講演はオンラインでしたが、木村会長をはじめ数名の先生方と久しぶりにお話しすることができてうれしく思いました。そういうことで、ここでは、私とアメリカスペイン語とのかかわりなどについて少しお話ししようと思います。

私は、1967 年にスペイン語の教員として京都産業大学に就職しました（たしか同年に日本イスパニヤ学会の会員になったはずです。会員番号 0295 のシニア会員です）。出身校の大阪外国語大学にはその当時、大学院が設置されておらず、助手とはいえ学卒のままで教壇に立つことになったこともあり、大学の好意によって、1970 年から 72 年にかけてマドリッドのコンプルテンセ大学に聴講生として留学することができました（もっぱら Rafael Lapesa 教授の語史の授業に出席しました）。帰国するときにスペイン系アメリカの数か国を回りましたが、コロンビアのボゴタではマドリッドで友だちになったコロンビア人の実家にお世話になりました。その友だちの父親の知り合いにカロイコエルボ研究所（Instituto Caro y Cuervo）の先生がいたことから、その先生とお会いし、日本とコロンビアに交換留学生の制度があることを教えてもらいました。帰国してしばらくしてから、これも大学の好意によって、交換留学生として 1976 年にほぼ 1 年間、研究所で勉強することができました（そしてその期間中に辞書編集法というテーマの集中講義に来られたのが、私の『南北アメリカ・スペイン語辞典』の資料となる数冊の辞書の編纂を指導されたアウグスブルク大学の Günther Haensch 先生でした）。この 2 度の留学経験から、ボゴタのスペイン語がマドリッドのスペイン語と比べて色々と異なっていることを実感し、その特徴を、学会誌『イスパニカ』の 21 号（1977 年）と 22 号（78 年）に『ボゴタのスペイン語』という題名で報告しました。これが私のアメリカスペイン語研究の出発点です。

私の研究テーマは、基本的に、スペイン語学の授業を自分で納得できる内容にするためのものです。ですから、とくにアメリカスペイン語を専門に勉強してきたわけではありません。『イスパニカ』にはその後、示小辞（25 号－81 年）、無人称文（26 号－82 年）、指示詞（29 号－85 年）、比較級（34 号－90 年）の論文を掲載してもらいました。しかしそのあとの投稿は、2009 年の 53 号（多義語「目」の日西対照研究）まで 20 年ほどの間が空きます。この期間は主に著書・訳書の出版に費やしました。1993 年に Francisco Marsá の『スペイン語文法評論』、94 年に教科書『スペイン文法中級コース』（2006 年に改訂）、95 年に共著の『中級スペイン文法』（いくつかの分担執筆のテーマのなかに「アメリカのスペイン語」があります）、2000 年に『簡約スペイン語辞典』、2004 年に Rafael Lapesa の『スペイン語の歴史』、2006 年に Juan Ramón Lodares の『セルバンテスの仲間たち』などです。そしてこの同じ年に『概説 アメリカ・スペイン語』を出版しました。アメリカスペイン語の概略を紹介したのですが、音声資料を含めることができなかったことで、出版社の大学書林にお願いして、2010 年に国別の特徴とともに音声資料を加えた『南北アメリカ・スペイン語』を出版しました。前者が文法の資料、後者が音声の資料です。そして 2013 年に 70 歳で定年退職した後、2016 年には『ス

ペイン文法中級コース』の解説書のような位置づけの『日本語と比べるスペイン語文法』を出版し、昨年（2020年）、ようやく、アメリカスペイン語の語彙の資料となる『南北アメリカ・スペイン語辞典』を出版することができました。これで資料の3点セットを日本のスペイン語学の学習者に提供する目論見が完了しました。

上記の20年ほどの間ですが、この期間にはまた、スペイン語研究の国際会議に20回ほど出席して、研究発表しました。「ラテンアメリカ言語学会」（ALFAL）が中心でしたが、学会のなかには *El español de América* というのもあって、アメリカスペイン語の勉強に大きな刺激を受けました。国際会議に参加することでスペイン語圏の何人かの研究者と親しくなり、直に貴重な情報を得られましたが、そこで知り合った人の支援もあって、2004年にはアルカラ大学で、*Los americanismos léxicos* と題する論文によって博士号を取得しました。いうまでもなく、これが『南北アメリカ・スペイン語辞典』の土台です。

70歳で退職したとき、あと10年、少なくとも年に1本は論文を発表しようと決めました。あと1年で傘寿を迎えることになり、なんとかその目標は達成できそうですが、もはや気力も体力も十分に衰えています。いつまでこのワルアガキを続けられるかわかりませんが、どうかよろしくお願いします。

（みよし・じゅんのすけ 京都産業大学名誉教授）

【追悼1】

出口厚実先生とスペイン語学

福嶋 教隆

1

大阪外国語大学（現 大阪大学）名誉教授 出口厚実（^{でぐちあつみ}厚實）先生が2020年12月8日に永眠された。享年78。スペイン語を言語学の広い視野から捉え、既成概念にとらわれない柔軟な着想によって多大な貢献をされた、秀でた言語学者だった。また、私ども弟子を常に温かく優しく遇し、学問の上では叱正ではなくご自分の妥協を許さぬ探究姿勢を示すことで導いてくださる、すばらしい師だった。

共著、共編の形で『講座日本語10 外国語との対照I』（明治書院、1982年）、『西和中辞典』（小学館、1990年）、『中級スペイン文法』（白水社、1995年）、『スペインの言語』（同朋舎出版、1996年）、『アデランテ』（第三書房、1997年、教科書）を上梓され、単著として『スペイン語学入門』（大学書林、1997年）を世に出された。本学会機関誌 *Hispanica* をはじめ、さまざまな逐次刊行物に発表された論文、研究ノート、資料、書評の類は数十点にのぼる。

2

出口先生の学問的立場は、上記のご著書『スペイン語学入門』の前書きに端的に表れている。たとえば、次のような説明がある。

「筆者が興味を引かれ、またスペイン語学へ入門しようとする読者に関心を注いでほしいと願うのは、(…) ルールと形式的手順の整合性の問題ではなく、結果として生じている、スペイン語の形や文が担う機能の多様性を地道に確かめることを通じて、その成り立ちや現象の本質を探るということである。」(p.1)

理論の枠に言語をはめ込むのではなく、言語の実態を知るために理論をツールとして活用しようとする姿勢により、先生の分析にはさまざまな言語理論や論理学、数学、情報工学の

考え方が援用されている。生成音韻論、格文法、関係文法などの発想を、非常に早い段階でスペイン語学に採り入れ、また、新たな概念規定を多数提案された。

先生の研究のうち、接続法、再帰動詞、音節構造に関する分析が特にスペイン語学界に大きな影響を与えている。

接続法については、「断定 (aserción)」や「従属」のような概念ではなく「否定」と関連づけて説明しようとした。1980年代には、接続法の機能を「陰否性」と「意志行為者性」とで捉える二元論に立ち、1990年代には多元論へと向かわれたが、事柄の真偽性、肯定と否定の問題を重視する姿勢は一貫していた。この主張は海外でも評価され、先生の論文 “Notas sobre la negación” (*Linguística Hispánica* 4, pp. 47-62, 1981) は I. Bosque & V. Demonte 編 *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid: Espasa, 1999 の第 49 章に引用されている。

再帰動詞については、その諸用法の間には共通の原理が働いているとする一元論に立たれた。その原理は「 $n-1$ 」、即ち動詞が要求する項が 1 つ減る、という形に集約される。他動詞の自動詞化用法では、動作主と対象が同一になって項が 1 つ減少し、受動用法や不定人称用法では動作主を表す項が表面から消える、といったことを指す。では、強調用法や相互用法はどのように説明されるのか、興味のある方はぜひ、先生の著作でその答えを調べていただきたい。

また、音節構造に関する研究の末、先生は、語アクセントについての一般的な教授法に疑義を呈されるに至った。教室では、まず音節の分け方を説明した上で、「最終音節が母音または -s, -n で終わる語のアクセントは…」のように教えることが多い。しかし先生は、第 1 に、語アクセントと音節は、一方が他方に依存しているのではなく、相互依存の関係にあること、第 2 に、上記の一般的な教授法には欠陥があることを指摘された。先生が提唱される代案は、編まれた教科書において実践されている。

3

『スペイン語学入門』の前書きの次の句にも、出口先生の研究姿勢がよく示されている。

「スペイン語の大小さまざまな断片の中に、1 つの言語事実を深く切り込んで考察するための出発点を (…) 発見し、新たな関心のテーマを増殖させる」 (p. 1)

先生が着目された「大小さまざまな断片」として、次のようなものがあげられる。命名はすべて先生の発案である。① *Iba a decir no sé qué cosa.* のような「接ぎ木文」。② *Yo era nadie.* (= *Yo no era alguien.*) のような「半否定文」。③ *Dos anguilas es suficiente.* (うなぎは 2 尾あれば十分だ。) のような特異な呼応の「どじょう文」。これは無論、日本語学の「うなぎ文」を下敷きにした名称である。④ *Gustarme sí me gusta.* (それが好きなことは、好きだ。) などの「胴上げ文」。日本語では「*好きなことは、好きではない。」とは言えないが、スペイン語では主節を否定にした *Gustarme no me gusta.* も可能だという。

こういう、ともすれば見過ごしがちな言語事実を手がかりとして「否定とは何か」「主題とは何か」といった議論へと発展させる、いわば、一粒の種から大輪の花を咲かせるような手法は、コンピュータ言語学と並んで、先生が成熟期に拓かれた境地だった。

4

私は、出口先生のご著書、論文、学会や研究会のハンドアウトを読み返すたびに、紳士的で控えめで、少しはにかんだ笑顔の先生の口元から、意表を突いた、しかし正鵠を得たアイデアの数々が語られるのを聞く思いがする。その中には、後進の私たちが引き継がず、発展させないままになっているものもある。今後は、わずかでも先生の教えを活かして勉強を続

けていきたい。

出口厚実先生、ほんとうにありがとうございました。どうぞ安らかに眠りください。

(ふくしま・のりたか 神戸市外国語大学名誉教授)

付記：出口先生が2006年度をもって大阪外国語大学を定年退職されたときに、先生をお送りする言葉として、次の文章が寄せられた。伊藤太吾「出口厚実先生を送る」、*Estudios Hispánicos* 31, pp. 1-2, 大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室、2006。Margarita Nakagawa “A un profesor y lingüista de primera categoría”, *Lingüística Hispánica* 29, pp. 1-2, 関西スペイン語学研究会、2006。また、ご著書『スペイン語学入門』については、この小文の筆者による紹介文がある（国立国語研究所・編『日本語とスペイン語（3）』、pp. 282-284、くろしお出版、2000）。

【追悼2】

田村美代子先生

山村 ひろみ

2021年2月10日、長崎外国語大学名誉教授であった田村美代子先生が亡くなられた。77歳になられたばかりだった。生前、先生と接する機会はほんの数回しかなかったものの、お会いした際の先生の明るさ、生き活きとした姿を知る者としては、とても信じられないことで一瞬耳を疑った。

今の若い研究者には田村美代子先生のお名前は馴染みがないかもしれない。しかし、私のようにもうすぐ定年を迎える者にとって、田村先生は、当時まだ数少ないスペイン語学の女性研究者のひとりとして憧れの人であった。先生は、幼少期から青年期にかけて、外交官のご尊父に伴い中南米で過ごされ、その経験からスペイン語教育のみならず、広くスペイン語圏の文化を広めることを天職になさった。以下、先生のこのスペイン語世界の文化の伝播に対する情熱について記していきたいと思う。

周知のように、現在日本の大学でスペイン語を第二外国語のひとつ、あるいは、第一外国語として認めているところは少なくない。しかし、そのようにスペイン語が選択可能な大学の多くは大都市に集中しており、いわゆる地方都市の小さな大学において、スペイン語教育を遂行していくことはそう簡単なことではない。田村先生が勤めていらしゃった長崎外国語大学は九州唯一の外国語大学であるが、その規模は小さく、先生が中心となって運営されていたスペイン語コースの学生数も少なかった。当時を知る人によると、先生はいつでもスペイン語世界の素晴らしさを学生に分かりやすく伝え、どんな質問・相談にも真摯に応じてくれる信頼のおける教師だった。しかし、特筆すべきは、先生のこのスペイン語世界に対する熱き思いは単に大学の授業に留まらず、長崎というスペイン語世界とは切っても切れない関係にある小都市とスペイン語世界を繋ぐ原動力ともなっていたという点である。

先生がいかに長崎という町を愛し、また、その長崎とスペイン語世界との交流にいかにか奔走していたかは、先生が大会開催実行委員長となられた2008年の日本イスパニヤ学会第54回の懇親会冒頭での先生のお話に明らかであった。先生は、あの笑顔で、長崎という町の素晴らしさ、その長崎がスペイン語世界といかに深い関りがあるかを熱く、また、誇らしげに語られ、会員全員を魅了したからである。そして、先生のこの長崎とスペイン語世界を結び

つけるという願いは、2012 年「長崎スペイン世界友の会」という会の設立に結実することになった。この会は先生亡き後の 2021 年 8 月現在においても活発に活動을續けており、長崎とスペイン語世界を繋ぐ架け橋となっている。

田村美代子先生の足跡をたどっていくと、ひとりの人間の情熱からどれだけ多くの人間が繋がり合い、大きな事業が達成され得るのが分かる。どんなところにおいても、先生が持っていたようなスペイン語世界に対する愛情とその素晴らしさを伝えようとする信念、行動力さえ持っていれば、人は繋がっていくのだ。先生と同じく、中央からいささか離れた地でスペイン語世界の魅力をいかに伝えようかと日夜模索している私にとって、先生は常に見上げるべき北極星である。田村美代子先生、どうか安らかにやすみください。

(やまむら・ひろみ 九州大学教授)

【追悼 3】

小林一宏先生へ

加藤 伸吾

私たち学部生が親愛を込めて「こばやん」と呼んでいた小林一宏先生との最初の出会いは、鮮明に覚えている。筆者が上智大学外国語学部イスパニア語学科を受験した際の 2 次試験小論文、たまたま教壇真ん前の席となった私は、時間配分を間違えて焦って小論文を仕上げていた。あとちょっとというところで、教壇を降りてゆっくりこちらに近づいてくる試験官氏。高い声で

「……もうできた？」

と言われ私が驚いて顔を上げると、ポロシャツの襟を立てた金縁メガネの中年男性がにっこりと微笑んでいた。小林先生であった。話しかけられた瞬間がちょうど小論文ができたところで、

「……はい」

とやっと答えることができただけだった。笑顔とため息まじりに

「OK!」

と先生は仰ったはずである。時計を見れば所定の時刻をやや過ぎていた。私が答案を仕上げるのを待っていてくださったのである。1995 年 2 月の、1 次試験は 7 日だったから恐らくは 8 日か 9 日、何事もおおらかだった（その裏に隠されていた不正義も多数あったはずであるが）、昭和末期から平成初期の昔ならではのエピソードなのかもしれない。

学部での筆者は、「決して出来のいい学生とは言えなかった」などと言えるレベルですらなかった。MR5（「マジで留年 5 秒前」、こういう言い方が流行っていた）。当時のイスパニア語学科の先生方の間では確実に問題児としてマークされていたはずである。

小林先生にもよく授業中叱られた。1 クラス 30 人程度だったせいもあるが、90 分の授業中当たる確率は極めて高い。予習してこないとすぐにバレるが、してきてもその場の思いつきで関連語彙や文法事項に関する質問を矢継ぎ早によくなさっていたので、他の授業や授業外の自主的な学習も含め、普段から総合的にコツコツ進めておかないと全く太刀打ちできなかった。できないと「XXXX（←任意の誤答）ですって！ な～に言っちゃってんですかあーたは」と叱られたが、そのお顔には苦笑いが浮かんでいることが多かった。それだけに正解時にあの

「OK!」

が出てくると相当嬉しかったものだった。なお、この「OK!」のモノマネは、筆者と同期入学のイスパニア語学科男子なら大体誰でも出来た。この学会にもいる現在東北大学の言語学者田林洋一さん、立教大学のマヤ学者郷澤圭介さん、国立西洋美術館の主任学芸員川瀬佑介さん、この 3 人のうち誰かに頼めば必ずやってくれるはずである。筆者は一番似ていない。できるのはうちの代だけではなかろう。福大の青木文夫さん、南山の泉水浩隆さん、他多数のはず。

モノマネといえば、小林先生は上州のご出身で、もちろんスペイン語圏帰国子女でもないわけだが、発音を授業中によく直していただいた。筆者は「外国語学習は発音や発音以外の要素、対象への愛着、敬意なども含めてモノマネの要素大」という信条を持っているが、それを教わったのは小林先生の教室であったかもしれない。なお、上州といえばご多聞に漏れず実際「カカア天下」だったようだ、とこんなところに書いては、筆者が天国（にいければそこ）でまた先生に、今度こそ本気で怒られるだろうが書いてしまう。先生と連絡するにはご自宅に電話するのが一番だった。大体電話口にお出になるのはご夫人であったが、先生は「呼ばれる」のではなくいつも「呼びつけられる」体であった。学生の頃叱られてばかりいた筆者はそれを初めて聞いた時、笑いが止まらなかったものである。令夫人、バラしてしまい申し訳ありません。

その後、落ちこぼれの筆者がどういうわけかスペイン語とスペイン現代史を教える立場になってしまったが、その間もずっとお世話になりっぱなしであった。よく先生の仕事場のマンションに呼んでいただいては、都度何かをご馳走になった。その際決まって同窓会の名簿を片手に、筆者と同期の人間が今何をしているかをお尋ねになっていた。また、パソコンの調子が悪くなるとよく拝見しにまた伺ったものだった。ところであのパソコンには、遺稿となるべき『スペイン語 文法と実践』の最新改訂稿が眠っているはずだが、その後あれはどうなっただろうか。

クラスメイトの話のみならず、先生の留学時代の話も伺った。中でも驚愕であったのは、敬虔なカトリック教徒でもいらした先生がぼつりと「私の留学の金はオプス（・デイ）から出てたんじゃないかなあ」と仰ったことだった。2002 年列聖されたホセマリーア・エスクリバーが創設し、今もスペイン政財界に隠然たる影響力を保持する、あのオプスである。

その真偽はさておき、その留学の仕上げに El Colegio de México で書かれた博士論文 *Educación como conquista*¹ は、同院から 2007 年にも再販されており、本稿執筆現在も日本の

¹ KOBAYASHI, José María, *Educación como conquista*, México D. F., El Colegio de México, 2007. (https://www.amazon.co.jp/dp/9681203151/ref=cm_sw_em_r_mt_dp_579Z1EP7JZ6DXA6SP456)

アマゾンから注文可能である。日本語ネイティブの手になる、スペイン語による、スペイン語圏に提出された博士論文としては、最初期のものではないだろうか。日本に帰国後も、イスパニア語学科 1 年生向けのスペイン通史入門書（イスパニア語科目の教科書としてスペイン語で書かれている）や、スペイン及びイスマノアメリカの数々の古典的史書の訳業を次々と手掛けられたのは、読者諸氏もご存知の通りである。スペイン史学会創設にかかわった先生方も、若い時にはよく小林先生のお宅で史料を見ていたと仰っていた。その歴史家としての仕事、特に外国史・国外地域史の黎明期に必要な、現地での古典的史書の翻訳及び一次・二次史料の紹介は、本邦のスペイン及びラテンアメリカ史学史に欠くべからざる 1 ページとして記録されなければならない。そのためにも色々伺いたい、と思っていた矢先、筆者留学先のスペインで聞いた突然の訃報であった。

……先生、ご本人がいなくては、モノマネのし甲斐もないんです。突然旅立たれるだなんて、あんまりではありませんか。せめて愛する神様の御許で、どうかゆっくりお休みください。そして私たち至らぬ後輩たちを、いつまでも見守っていてください。お願いします。安らかに。

（かとう・しんご 慶應義塾大学専任講師）

【エッセイ 1】

数えられる、数えられない、数えない

二宮 哲

コロナ禍に入ってから、日本のみならず、海外の感染者数も気になり必要以上に新聞やネットに上がる数字を連日チェックしている。情報上の数字が上がったり下がったりしても感染拡大を抑えるために個人に必要なことは特に変わらず決まっているのだからどうでもよいことである。でも気になる。

感染者数という数字は数えるわけではなく量で捉えている。数というと、数える、という意識が働くが、感染者数を数えてはいない。感染者の量の多い少ないを感染者数に準えてなんとなく捉えている。百よりは千、千よりは万が多い、といった具合である。数えると 1001 と 1002 や 1010 は異なるが、量で測ればほぼ同量と言える。我われ一般人はもちろんのこと、感染者数の合計を日々出している厚生労働省でも上がってくる数字の量を合計しているだけだ。数えはしない。もちろん 1 万ほどの数字なら数えることはできるが。

近所の子供と恐竜の話をした。T. rex は白亜紀の終わり頃にいた恐竜だぞ。白亜紀ってなに？ 白亜紀っていうのはな、ずーっと昔むかしの時代のことだよ。えー、どれくらい昔なの。1 億年くらい前。えー、すごい前だねー、おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんは生きてたかなあ。いやいや、もっとずーっとずーっと前。1 億くらいのスケールになると、子供ならずとも庶民には真っ当に意識ができない量である。もちろん数えるにはそれなりの覚悟がいる。休暇を利用したい。

夜空を眺める。地上も色々と騒がしいが、天空も今年はさまざまな天体ショーが楽しめる年だ。もうすぐペルセウス座流星群が極大になる。流星群も普段だと、ぼつぼつと見える流れ星の数を数えて、いくつ見えた？ と聞けるのだが、極大ともなると、いっぱい見えたねー、

のはずだ。数えられないから数えなくなる。ただこの肉眼ではそう言えるのかどうかもそろそろ怪しい。

流星群でもなければ、星を数えることが目的で夜空を見上げて星を数える人はあまりいないだろう。星の数ほど星はある。天文学者などはある特定の倍率で接眼レンズに映る星の数を数えたりするらしいが、この倍率で 1 接眼レンズ分の星、というような表し方をするのだろうか。ましてや砂浜の砂粒の数を数えようとしたことなど一度もないだろう。砂の城を作りながらバケツ 1 杯分の砂とそれを固めるためのバケツ 1 杯の海水を求めることはあっても、砂をあと何粒頼む、という言い方を聞いた試しはない。

数えられる、と、数えられない、は対象に依存可能な（あるいは言語が対象をどう捉えているかの）概念である。しかし言語現象として現れた、数えられる・数えられない、と、数えない、の間の壁は外延に明確には存在しない。話し手が発話ごとに決めるものであるからだ。だから記述が難しい。

コロナ禍に入る直前、ありがたいことに大学から研究休暇を頂いてスペインへ行くことができた。次に彼の地を踏めるのはコロナ明けのこの休み辺りかな、と指折り数えては、いない。

(にのみや・さとし 獨協大学国際教養学部教授)

【エッセイ 2】

スペイン語と古代日本語の対照： se 中動態（再帰構文）とラレル構文

志波 彩子

私は、現在名古屋大学で、学部の授業では初修外国語のスペイン語を担当し、大学院では日本語教育学分野にて日本語学や日本語文法を担当しています。私がスペイン語に出会ったきっかけは、高校時代にメキシコに長期留学したことでした。日本語教師を目指して東京外国語大学の日本語学科に入学しましたが、スペイン語の再帰動詞に興味を持ち、再帰動詞の自動詞化について卒業論文を書きました。その後、国際協力事業団（JICA）派遣の日本語教師としてブラジルで 2 年間日本語教育に携わり、帰国後に大学院に入りました。大学院でも、日本語のゼミとスペイン語のゼミを行ったり来たりしていましたが、対照研究の難しさを感じ、博士論文は日本語の受身構文のみを分析するものになりました。

現在の名古屋大学の仕事は、そんな私を再びスペイン語に向かわせてくれた、かけがえない機会となったと思っています。スペイン語を教え始めたおかげで、もう一度スペイン語と向き合いたいと真剣に思うようになりました。そうして、昨年末（2020 年 12 月）に、言語学会の学会誌『言語研究』158 号に「受身・可能とその周辺構文によるヴォイス体系の対照言語学的考察 ―古代日本語と現代スペイン語―」という論文を載せることができました。この論文の構想は、2004 年に東京外国語大学に提出した修士論文の内容がもととなっています。15 年以上の年月を経て、修士論文の内容を世に発信することができました。

本研究は、現代スペイン語の se による中動態の体系（一般に再帰構文と言われる）と、古代日本語の-(r)are-という接辞（以下ラレルと表記）による構文の体系を対照し、その共通点と相違点を指摘したものです。これまで、言語類型論などの立場から、受身を表す形式が自発や可能を表すことが指摘されてきました。しかし、実際にはどこが本当に同じで違うのか、ということを経査したのが本研究です。

スペイン語の se による中動態の体系には、次のような下位構文があると考えています。

- (1) 外向的再帰・相互構文：Juan se ama (a sí mismo).や odiarse, mirarse, golpearse, tocarse 等、本来他者に働きかける行為の対象がたまたま自分自身であることを表す構文。
- (2) 中動状況構文¹（内向的再帰）：身づくろい afeitarse, bañarse, peinarse 等／姿勢の変化 sentarse, agacharse 等／本来的相互行為 pelarse, casarse 等／感情 enfadarse, irritarse 等／感情的発話 quejarse, lamentarse 等／思考 pensarse, creerse 等、人間の主語が発した行為が主語の領域で完結することを表す構文。
- (3) 自然発生構文：romperse, doblarse, derretirse, teñirse, hundirse, pegarse, secarse, calentarse, arrugarse, apagarse 等、モノの自然発生的変化を表す構文。
- (4) 受身構文（受動構文）：Se firmaron los tratados.や publicarse, utilizarse 等、動作主がいなければ起こりえない事態を、動作主を背景化して述べる構文。
- (5) 非人称構文：Aquí se vive bien.等、自動詞の表す事態の行為者を背景化する構文。

これらの構文は、ほぼここに並べた順に派生し、拡張していったと考えられます (Haspelmath 2003, 寺崎 2011 等)。つまり、もともと再帰代名詞だった se が、古典ギリシャ語や古典ラテン語が表していた中動状況に用いられるようになり、さらにそうした人間の行為が、モノ（無生物）が主語に立つ romperse 等の自然発生の構文 (El vaso se rompió.) へと拡張しました。この自然発生の意味とは、動作主の介在なしに対象の特性によって変化＝事態が実現し自らの領域で完結する、という意味ですが、これがさらに、動作主がいなければ起こりえない事態（動作主必須動詞）までを、動作主を背景化して事態実現に焦点を当てて述べる構文として拡張したのが受身だと考えられます。そして、他動詞による受身構文が自動詞にまで拡張したのが非人称構文です。

一方、日本語のラレルも、自然発生の意味を表すラ行下二段自動詞（枯れる、暮れる、惚れる等）の活用語尾が再分析されて、文法的接辞として取り出されたと言われています。つまり、日本語のラレルも、スペイン語の se 中動態と同じように、自然発生の意味（捉え方）を動作主必須動詞に拡張し、受身を発達させた点では共通していると言えます。ただし、日本語の受身は人間が主語のものが中心で、スペイン語のような無生物が主語の受身はほとんどありませんでした。

なぜラレル構文では無生物主語の受身がほとんど存在しなかったのか。これは、ラレル構文が人間に視点を置く構文として発達し、無生物主語の受身の代わりに、自発・可能といった構文を拡張させたからだと本研究では主張しています。

どういうことかと言うと、ラレル構文はおそらく、「庭の梅の枝が折れた」のような、誰にも視点を置かずに中立的に自然発生を述べる自動詞文ではなく、次のように人間に視点があり、その人間に対してその人の意志やコントロールと無関係に事態が発生する、という意味の構文から拡張したのだと考えられます。

¹ スペイン語では(1)の外向的再帰とこの中動状況は非常に連続的で分けにくいですが、本研究では言語類型論的な差異を考慮してこれを分けている。中動状況とは、Kemmer (1993)で「中動状況タイプ (middle situation type)」として挙げられた状況タイプを含んでいる。Kemmer では、この中動状況タイプに何らかのマーカ―が現れる言語は中動態を持つと規定した。スペイン語は、Kemmer の示した中動状況タイプのほぼすべてに se が用いられることから、中動態を持つと考えられる。この中動状況タイプは、人間の内向的な行為を表す事態であり、これが中動態の中核をなすと考えられる。一方、中動態を持たない英語や日本語などでは、再帰代名詞は外向的再帰のみに現れる。

- (6) 上のおぼつかながり嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかるをりだにと心もあくがれまどひて、いづくにもいづくにももうでたまはず、(源氏・若紫) [(源氏は) 帝がご心配なさりお嘆きなさるそのご様子も、たいそうおいたわしいとお見申し上げながらも、こういう時こそ (かねての自分のひたすらな思いを遂げるチャンスだ) と、自分の身から心も抜け出て (藤壺の宮のことを) 思い悩んで、どこにもどこにもお出かけにならず、]

この「あくがる」という動詞はラ行下二段の自動詞ですが、「魂が体から離れてさまよう」という意味で、ここでは源氏の心内を描写して源氏に視点を置きながら、源氏に対して「心もあくがれまどふ」ということが、本人の意志やコントロールと関係なく起こることを表しています。このように、視点を置いた人に対して、その人の意志と関係なく事態が発生する(自ずから然る)ことを表す自動詞がラ行下二段には多かったのだと考えられます。

人間に視点を置きながら自然発生を述べる自動詞構文から取り出されたラレルは、「自分に対して、自分の意志と関係なく事態が実現する＝自発」、「自分がある行為を実現しようとしても、事態が実現しない＝不可能 (恋しくて湯水も飲まれず)」、「自分に対して、自分の意志と関係なく他者による行為・事態が実現する＝受身 (人にかしづかれる)」という構文を確立したのだと考えられます。

具体例を挙げると、古代日本語の自発文には心理動詞によるものが多いですが、次のような動作動詞による自発も見られます。

- (7) いみじう暑き昼中に、【中略】こちたう赤き薄様を唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけて、取り入れたるこそ、書きつらむほどの暑さ、心ざしのほど浅からずおしはかられて、かつ使ひつるだにあかずおぼゆる扇もうち置かれぬれ。(枕草子) [たいへん暑い昼のさなかに、【中略】ひどく真っ赤な薄様の手紙を、唐撫子のこれも真っ赤に咲いたのに結びつけてあるのを受け取ったのは、その人がこれを書いていた間の暑さや、こちらへの好意の深さが、並々でないようにおしはかられて、氷を持つ一方で使っていてさえ物足りなく感じられる扇も、思わずそばに置いてしまうのだ。]

上の例では「おしはかられて」と「置かれぬれ」がいずれも自発を表しています。つまり、「扇も置かれた」というのは、「扇が誰かによって置かれた」という無生物主語の受身ではなく、自分に対して自分の意志と関係なく「扇が置かれた」という事態が発生した、という意味として用いられています。このように、古代日本語では「条約が調印された」とような中立的な視点で動作主を背景化し、事態の実現を強調する無生物主語の受身ではなく、人間に視点を置いて、その人に対して事態が実現する・しないという意味の自発と可能を中心的に発達させたのだと考えられます。

中古(平安時代)に自発・可能・人間主語の受身(、そしてやや劣勢な構文として尊敬)を中心に発達したラレル構文ですが、その後可能の勢力が強くなり、自発は一部の心理動詞にその使用が限られて行きます。そして、可能は、中世から近世にかけて、五段動詞で新たな接辞-*e*-を獲得しました(読める、飲める等)。近代(明治)に入り、欧文直訳の影響で日本語の中に多くの無生物主語受身構文が取り入れられることになり、可能はますますラレル構文から追い出されることになります。現代でも「ら抜き」と呼ばれる現象で、一段動詞の可能動詞化(食べれる、覚えれる等)が進み、ラレル構文は受身専用の構文へと変化しつづくと考えています。

ここでは詳しく述べませんでしたが、*se* 中動態は可能の意味を表す場合もあり(志波 2020)、

「自然発生から受身、可能を発達させている」点で古代日本語と共通しています。しかし、両言語が発達させた受身は、日本語では人主語であり、se 中動態では無生物主語でした（可能のタイプも異なります）。本研究は、以上のように両言語の共通点と相違点を明らかにしつつ、「無生物主語＋動作主必須動詞＋自然発生形式」という構造形式に、視点の違いによって、無生物主語の受身、自発、可能といった意味が現れる原理を明らかにしたところに、オリジナリティがあると思っています。

【引用文献】

Haspelmath, Martin (2003) *The Geometry of Grammatical Meaning: Semantic Maps and Cross-Linguistic Comparison*. In: Michael Tomasello (ed.) *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure Vol.2*, 211-242. Mahwah, New Jersey & London: Lawrence Erlbaum Associates.

Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice (Typological Studies in Language 23)*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

志波彩子 (2020) 「スペイン語の se 中動態における可能の意味」『名古屋大学人文学研究論集』3: 175-195.

寺崎英樹 (2011) 『スペイン語史』東京：大学書林.

(しば・あやこ 名古屋大学大学院人文学研究科准教授)

【エッセイ 3】

エッセイが書けない

蔦原 亮

ありがたいことに会報ご担当の理事の方から「何かエッセイを」とのご依頼をいただき、「『拝啓査読者様 (仮)』という感じの、Hispanica の査読者の先生方への感謝をテーマに書かせていただきます」とお引き受けいたしました。制度上、直接お礼をすることのできない査読者の先生方にお礼をしたいとずっと考えていました。また、これまでに拙稿を読んでくださった査読者の方々の懇切丁寧さ、的確さと熱意、そしてそれを、コロナ禍の年度始まりという時期であっても例年通り2か月未満という短期間で完遂されるプロフェッショナルリズム。そうしたことを私しか知らないのはもったいないとも考えており、このご依頼は渡りに船を得るが如しでした。

早速取り掛かってみたのですが、根がどこまでも阿諛追従の徒にできているせいか、どう書いても安いお世辞とおべっか、もしくはプロパガンダのようなものにしかならず、泣く泣くこのテーマを諦めました。本当に心から感謝しているのですが……

そこで別のテーマを検討することにしましたが、自分がエッセイに書くようなことを何一つ持たない人間であることに気づいてしまいました。研究も教育も、自分なりに考えていることはもちろんあるのですが、同業の皆様は「僕はこう思います!」と改まって申し上げるほどのものがないのです。アオかった修士の頃、「自分の専門領域だけでなく、様々な事柄について自分の言葉で語れるような人になりたい」というようなことを四谷の日高屋で同級生相手に熱弁した記憶があります。12 年前の私が思い描いていた理想の私なら、まさに、こうした様々なご専門の方々にも面白く読んでいただけるようなエッセイをいくらでも書けるはずだったのですが。残念ながらそうはなれませんでした。

そんなわけで、開き直って「エッセイを書けない自分」をテーマにすることにしました。何故私はエッセイを書けない 35 歳になってしまったのかを考えてみようと思ったわけです。様々な要因があるはずですが、手堅くなりすぎたというのが結構大きい気がしています。

研究教育の両面で「こうしておけばまあ、最低限、形にはなるな」という自分なりの物事の進め方がここ数年で身についたという感触があります。これ自体は悪いことではなく、迷走か空回りのどちらかしかなかった院生時代や教壇に立ちたての頃と比べると、今の私は大分マシになっていると思います。しかしながら、これは裏を返すと、「確実に論文にまとまりそうにないことや、学生にとって直接的に、すぐのためにならなそうなことを捨象する」という考え方です。要は遊びとゆとりがないということになるかと思うのですが、特に会報のエッセイのような書き物のタネはここ数年の私が無意識に捨象してきた部分にあるのではないかと、そんな風に思われてなりません。目の前のやるべき研究と授業を成立させることに集中しすぎるがあまり、元々狭かった視野がさらに狭くなっていた。そんな心当たりが多くあります。

そして、自己申告ではありますが、視野を犠牲になんとか成立させている研究と教育もこうした「遊びなき手堅さ主義」にしがみついてしまえば、いずれは先細るのだと思います。そんな自己批判モードに入ったところでふと思い出したのが、宮沢賢治の「告別」という詩でした。これは作者が教職を辞す際に、楽器演奏の才のある教え子に向けて書いた作品です。この詩は生徒の才能をあたたく褒めるところから始まるのですが、読みどころはそれに続く、以下のかかなり厳しめの叱咤激励部分でしょう。

「けれどもいまごろちゃうどおまへの年ごろで おまへの素質と力をもってゐるものは 町と村との一万人のなかになら おそらく五人はあるだらう それらのひとのどの人もまたどのひとも 五年のあひだにそれを大抵無くすのだ 生活のためにけづられたり 自分でそれをなくすのだ すべての才や力や材といふものは ひとにとゞまるものでない ひとさへひとにとゞまらぬ」

「そのあとでおまへのいまのちからがにぶり きれいな音の正しい調子とその明るさを失って ふたたび回復できないならば おれはおまへをもう見ない なぜならおれは すこしづらみの仕事ができ そいつに腰をかけてるやうな そんな多数をいちばんいやにおもふのだ」

大学を取り巻く状況もコロナ禍も、なかなか遊び心と余裕をもって研究と教育を行うことを許してくれません。宮沢賢治の言う、「多くの侮辱や窮乏の それらを噛んで歌ふのだ」という域にも到達できそうもありません。それでも、今の未熟な手堅さ主義に固執することだけはなんとか避けよう。最終的にはそういうことを考えるに至ったエッセイとの格闘でした。

(つたはら・りょう 九州大学言語文化研究院助教)

【エッセイ 4】

盗掘者？：存在しない「ピラミッド」で発掘する考古学者

嘉幡 茂

“¿Vinieron aquí por los centenarios?”

開口一番、共有地組合（Comisariado Ejidal）との初めての会合でこの質問を受けた。（？？？……百寿の老人たちを探しにここに来たのか？と聞いた？……なんか違うな。センテナリオス家を求めて？……いやー、そんな名字ないし、これも違うな。……百周年祭とかがいくつかあって、それらを調査しに来たのか？という意味？）

そもそもこの会合は、メキシコ合衆国プエブラ州サン・マティアス・トラランカレカ村の郊外にある共有地（トラランカレカ遺跡；紀元前 800～紀元後 300 年）で、僕たち日本人考古学者が発掘調査（トラランカレカ考古学プロジェクト）を行うことを説明し、組合からの理

解と協力を得るために開いてもらった。組合には既に研究計画書やメキシコ政府から得た調査許可書を提出していたため、彼らは僕たちが何を行いたいのか知っているはずなのだ。にもかかわらず、何故会合の主旨と無関係で、しかも意味不明な質問を投げかけるのか。(歓迎していないと暗にほめかしている？ いやー、そんな高度な外交術はごめんなんやけどな。)

質問の意図を理解していないだろうと感じ取ったメキシコ人研究協力者が、「金貨を探しに来たのか？と訊いている」と僕に耳打ちしてくれた。(……あっ—なるほど、そっちの“centenario”の意味か。) 僕はそのような意味があったことを思い出すと同時に、面倒であるとも思ってしまった(今は反省している。このような経験が研究に直に活かされている)。

キャッチボールが成立しないこの会話から、メキシコの地域社会の歴史やアイデンティティに関する問題が垣間見られる。“centenario”のシニフィエが手掛かりである。辞書的には、1921年に発行された記念金貨を指し、これはメキシコ独立革命の達成(1821年)から100周年を祝うため発行された。ただ、地域社会の住民にとっては、この定義に限定されず、換喩として金貨全体を表す。母国文化風に訳すなら「君たちは大判小判を探しに来たのか？」だ。

僕が即座にこの訳に至らなかったのは、2つの思い込みがあったからである。一つ目は、僕たちは純粋にこの遺跡で発掘調査を実施したく、金貨などに興味は全くないからである。(もしかして、考古学という単語を聞いたことはあっても、何をするのか知らないのかな。でも、学史的にとっても貴重な遺跡なのに知らないはずはないよな？) 二つ目は、既にいつの時代の遺跡を調査するのかを伝えており、この時代に冶金術が未発達であったことは自明だからである。(自国の社会発展史についての知識がないのかな？ それとも、興味ない？)

僕が心の中で危惧したことは、残念ながら正解であった。

彼らに、発掘調査をどのように行い、どのようなデータが欲しく、それをどのように活かすのかを懇切丁寧に説明した。さらに、トラランカレカ遺跡は大きな古代都市であり、ピラミッドからとても貴重なデータを回収することができ、メキシコの歴史を深めることができるとも力説した。また、この時代には冶金術は存在せず、その起源は南米にあり紀元後600年ごろになってから漸くメキシコで発展したことも話した。

しかし、根本的な問題はここになかった。

「君たちは何しにここに来た？」と投げかけられたからである。(えっ、僕の話聞いてくれてはったよね??) 「ラ・ペドレーラ(La Pedrera: 地元の人々はトラランカレカ遺跡をそう呼ぶ)には、テオティワカンのようなピラミッドなど存在しない！ 仮に、金貨が目的ではないとして、出てきた物をどこに持っていく？ あそこにはよく盗掘者が来て、貴重な人形(idolo: 考古学者はfigurillaと呼び土偶を指す)を奪っていく。君たちとどう違う!？」

ここに至り、僕は自分が「アームチェアー人類学者(現地を訪問せず、自国内で収集できる情報から研究を進める研究者を指す。この用語は批判的に用いられるが、『菊と刀』などの研究成果に鑑みこの研究手法を切って捨てることはできないが)」であったと思い知った。僕は遺跡のみを見て今に生きる人を見ていなかったのだ。

地元の人々は、そもそもラ・ペドレーラが遺跡であることも知らなかった。なぜなら、現在の景観は、何の変哲もない農耕地が広がるのみだからである(写真1)。彼らにとってのピラミッドとは修復保存された巨大な古代建造物を指す(写真2)。僕たち研究者にとっては、ピラミッドとは風化し破壊された状態のものも含めた総称である。彼らは、ラ・ペドレーラに散見されるピラミッドを、単に「小塚(cerrito)」と呼ぶ。ここにピラミッドは存在しない。確かに考古学者は出土した遺物を分析するために持ち帰る。しかし、彼らにとって重要なのは、分析するという名分ではなく、どこかへ持ち去り地元には返さないという遺物の動きに



写真 1：トラランカレカ遺跡の中心部（かつて巨大なピラミッド群が存在した。しかし、現在はトウモロコシ農耕により大部分は削平にあっている。遺跡の破壊と言える。古代都市が存在し学術価値の高い場所であっても、この土地は農業従事者の貴重な収入源である。ラス・アメリカス・プエブラ大学に在職中（2013 年～2019 年）、「Mesoamérica（メソアメリカ文明）」の授業を受け持っていた。最終レポートのテーマは「トウモロコシ対文化：重要なのはどちらか？ 自由に論述せよ」であった）



写真 2：テオティワカンの「月のピラミッド」とその周辺の写真（歴史学的に見てメキシコにおける国家の起源であるとも解釈される。多くの人的・経済的資源がこの遺跡に流れる）

ある。盗掘者と変わらない所以である。

何とか説得したい。「ここに政府から得た調査許可書があり、僕たちは決して奪いません。」

政府の許可書は水戸黄門の印籠ではない。火に油を注ぐアイテムだ。

「政府が私たちに何をしてくれた？ この許可書は、君たちを手先としてラ・ペドレーラで情報を収集し、土地を奪うために発行されたのではないか？」

誠意は伝わらない。

メキシコ政府は国民を統一するため、古代文化を取捨選択し、選んだ文化に過剰な栄光を与えてきた。テオティワカンからトルテカへ、そしてアステカへと古代史を単系化し、これ以外の古代社会に政治的価値を見出さなかった。公定の古代文化に歴史的な繋がりや文化的誇りを見出せない周縁に位置する農耕民は、結果、政府が形成したナショナリズムを共有できず、アイデンティティ形成の拠り所を失っている。

この会合は 2012 年 7 月に行われた。9 年が経過した。この間、考古学調査を行いながら、現地説明会、講堂での成果報告、小冊子の配布、マンガの作成といった広報・教育活動を繰り返してきた。古代社会を復元する研究は重要だ。しかし、地域住民にさらには現代社会に、何をそしてどのように貢献できるのか、これらを射程に入れた考古学研究がより必要とされている。

(かばた・しげる 京都外国語大学国際言語平和研究所嘱託研究員)

【書評 1】

Yoko Ikuno, *Mimesis: diccionario bilingüe japonés-español del uso de onomatopeyas*

(Liberas Press, 2021)

成田 瑞穂

本書は日本語のオノマトペ（擬態語・擬声語）の語義・用法を扱う和西辞典である。日本語のオノマトペは、母語話者が感覚的にその意味を把握する表現であることから、会話や文芸作品などのあらゆる日本語表象場面で多用される一方、非日本語話者にとっては語義の認識が難しい。そのため、日本語から他言語への文芸作品の翻訳では省略、誤訳されてしまうことも少なくなく、文学領域においてオノマトペの日西翻訳の問題を扱う研究もある。また、日本語の言語学領域においてもオノマトペ研究は進んでおり、その成果であるモノリンガルのオノマトペ辞典も数多く刊行されている。とはいえ、他言語との対照研究分野においては日本語－英語、日本語－中国語のオノマトペ辞典が刊行されているだけで、スペイン語話者、スペイン語への文芸翻訳者を対象とするバイリンガルのオノマトペ辞典は本書が草分け的存在である。

序文で「日本語文芸作品のスペイン語への翻訳の質向上に寄与する *contribuir a mejorar las traducciones literarias del japonés al español*」(p. 9) ことを刊行目的に掲げる本書は二部構成になっている。第一部は「理論編」であり、本書の著者生野陽子氏による博士論文 «*Estudio comparativo de las mimesis del japonés y el español. Propuesta de marco teórico ante los problemas de traducción*» (2018) の内容がコンパクトにまとめられている。第 1 章では先行研究を踏まえた日本語オノマトペの形態音韻論的特性、統語意味論的特性の概説と、スペイン語との言語学的相違点の分析が提示されている。このうち、特に「オノマトペ標識 *marcadores*

onomatopéyicos」の分類と、助詞「と」「に」との共起の有無、オノマトペ表現の「語彙化 lexicalización」に関する日西対照分析は、日本語―スペイン語の翻訳者にとって大いに参考になる。というのも、日本語オノマトペは容易に新語作成が可能であり、文芸作品には作者オリジナルのオノマトペ表現が表出することがあるからだ。日本語の音象徴メカニズムを共有していないスペイン語話者にとって、本章の考察内容は、造語オノマトペの語義を理解する助けになるはずである。そして第 2 章では、オノマトペの多くが副詞としての機能を有することから、日本語文法における副詞のカテゴリ分類のあり方を検証している。生野氏は副詞的オノマトペの分析をもとに、形容詞の下位カテゴリにあるとされてきた副詞が、名詞、動詞、形容詞と同様に「単純語 categoría léxica pura」の語彙カテゴリを形成する、と結論づける。さらに、副詞を独立した単純語カテゴリとみなすことで「複合語 categoría léxica mixta」の語彙カテゴリに「オノマトペ＋スル／ナル」表現を副詞的動詞として新たに加えることができるという。その結果、スペイン語との語彙カテゴリ対照もさらに明確になり、日本語オノマトペのスペイン語への翻訳がより正確なものになることが期待できる。

第二部が「実践編」とも呼べる「日西オノマトペ用法辞典」である。約 300 の見出し語は宮沢賢治『銀河鉄道の夜』『注文の多い料理店』、小川洋子『博士の愛した数式』『ミーナの行進』の 4 作品から抽出したもので、アルファベットと日本語かな表記が併記され、スペイン語での語義説明がある。既存のバイリンガルのオノマトペ辞典にはない本書の特徴として、見出し語のオノマトペが共起する品詞が記載されている点が挙げられる。たとえば「Bon-yari ぼんやり」の項では、この擬態語が動詞、形容詞、副詞、「スル／シタ＋名詞」と共起し、その複合語がそれぞれ、程度の副詞、程度の副詞的動詞、形容詞的機能を持つ副詞的動詞のカテゴリに分類されることが、小説作品からの引用文とともに示されている。この分類と、第一部「理論編」で概説される日本語とスペイン語の語彙カテゴリ対照により、翻訳者は、個々のオノマトペが文においてどのように振る舞うのかを理解し、最適な訳語を見出すことができる。

本書は日本語からスペイン語への文芸翻訳に携わる翻訳者や、上級レベルの日本語を学ぶスペイン語話者にとって有用な参照ツールである。また同時に、日本語オノマトペの統語論的特性がスペイン語で解説されている本書は、スペイン語を教える／学ぶ日本語話者にとっても、日本語とスペイン語への気づきを促す格好の参考書であると言えるだろう。

(なりた・みずほ 神戸市外国語大学教授)

【書評 2】

Yuko Morimoto, *Los artículos del español en contraste*
(Arco/Libros, 2021)

Saori KOBASHI

Esta obra forma parte de la nueva colección *El español en contraste* de la editorial Arco/Libros (España). Según su página web oficial, esta colección se caracteriza por presentar los estudios desde una perspectiva comparativa de las diversas lenguas, como indica su título. Está dirigida a todas las personas interesadas en el lenguaje, como los estudiantes de cualquier filología o traductores y

profesores de lenguas. El objetivo de este libro es ofrecer una descripción de las propiedades semánticas y gramaticales del artículo español en contraste con otras lenguas del mundo.

El trabajo está organizado en cinco capítulos. En el primero se introducen los conceptos fundamentales adoptando la línea planteada por RAE/ASALE (2009). Los siguientes capítulos se centran en la descripción del artículo español a través del estudio contrastivo: los sintagmas nominales sin determinante (cap. 2), el artículo definido (cap. 3) y el artículo indefinido (cap. 4). El último capítulo está dedicado a las aplicaciones prácticas y nos ofrece ejercicios para ayudar a comprobar los conocimientos planteados en los capítulos anteriores. En cada capítulo (menos el cap. 5) se dedica una parte al estudio comparativo.

En un libro especializado en el artículo, es imprescindible incluir la explicación sobre la diferencia entre los casos de la ausencia del artículo. Establecer la comparación entre los tres tipos (el artículo definido, el indefinido y la ausencia del mismo) es relevante para facilitar la comprensión de los lectores. Así mismo, puede satisfacer la demanda de lectores como, por ejemplo, los estudiantes de ELE, que toman este libro con la esperanza de entender el sustantivo sin determinante como el caso de la ausencia del artículo. Los datos muestran que este caso provoca confusión frecuentemente en los alumnos japoneses de español (Kobashi, 2017).

Una de las características más destacables que definen este libro es su claridad meridiana. Pese a ser un libro poco extenso, consigue la difícil tarea de describir el sistema del artículo sin perder la profundidad en las explicaciones, recurriendo a numerosos ejemplos que la autora ha seleccionado cuidadosamente con sensatez y a múltiples referencias a estudios precedentes esenciales en este campo.

Una de las aportaciones más significativas de este trabajo es el contraste del artículo español con las diversas lenguas del mundo. Se ponen de manifiesto las propiedades del artículo que el español comparte con algunas lenguas y aquellas otras en las que difiere de ellas. Con los abundantes ejemplos podemos observar que: *numerosas lenguas [...] carecen de[l artículo...]; no todas las lenguas que sí lo poseen disponen del artículo definido y del indefinido [...]; el artículo no siempre se manifiesta en forma de una palabra; tampoco aparece siempre en posición prenominal [...]* (p. 19). Respecto a los ejemplos, se han recopilado los casos de las lenguas romances, como el francés, el italiano, el portugués, el rumano o el catalán; las lenguas eslavas, como el ruso, el polaco, el eslovaco, el búlgaro o el macedonio; las germánicas, como el inglés, el alemán, el neerlandés, el noruego o el sueco; las escandinavas (o germánicas septentrionales) como el danés o el islandés; las de Asia Oriental, como el chino, el coreano o el japonés. También se han recogido muestras del irlandés, el griego clásico y el moderno, el árabe, el turco, varias lenguas polinesias, etc. Con estos ejemplos podemos apreciar la gran diversidad que existe entre las lenguas del mundo acerca del artículo. Otra contribución notable es que ofrece una serie de actividades muy útiles (cap. 5). Aquí, además de los ejercicios de autocomprobación, se proporcionan los de *sugerencia para la clase de ELE*. Estos modelos serán de gran ayuda para los profesores de ELE a la hora de ejercer la práctica del artículo.

En definitiva, la presente es una excelente obra sobre el artículo, valiosa y singular, con particular énfasis en el estudio comparativo. En este libro, basándose en las investigaciones precedentes más relevantes, la autora describe esta categoría gramatical con expresiones muy claras y concisas con numerosos ejemplos y, además, ofrece un panorama de la enorme diversidad del artículo en las lenguas del mundo. Es una obra de gran utilidad para todo aquel que tenga interés en el artículo,

así como una fuente de datos muy enriquecedora para investigaciones presentes y futuras.

OBRAS CITADAS

ARCO/LIBROS-LA MURALLA [en línea]:

https://www.arcomuralla.com/index_seccion.php?seccion=Espa%F1ol%20/%20Lengua%20Extranjera&ideditorial_get=1&idSections=2 [consulta: 15/08/2021].

KOBASHI, SAORI (2017) *Enseñanza y aprendizaje del artículo en español por parte de estudiantes japoneses* (Tesis doctoral). Universidad Complutense de Madrid.

REAL ACADEMIA ESPAÑOLA / ASOCIACIÓN DE ACADEMIAS DE LA LENGUA ESPAÑOLA (2009) *Nueva gramática de la lengua española*, Espasa Libros: Madrid.

(小橋さおり 順天堂大学助教)

【書評 3】

岩根 圀和『ドン・キホーテのスペイン社会史』

(彩流社、2020 年)

小阪 知弘

岩根 圀和氏執筆による『ドン・キホーテのスペイン社会史』が 2020 年 11 月に刊行された。本書は『ドン・キホーテ』（前篇 1605 年／後篇 1615 年）誕生をめぐる歴史的背景とセルバンテスが生きた黄金世紀（17 世紀）における衣食住そして、風車と水車を中心とする当時のスペインにおける科学技術の発展を社会的観点に立脚して考察した研究書である。岩根氏は『ドン・キホーテ』に纏わる翻訳書や研究書をこれまで上梓してきた。訳書に、『ドン・キホーテ（上・下）』（彩流社、2012 年）とアベリャネーダ作の『贋作ドン・キホーテ＜上・下＞』（岩根 圀和訳、ちくま文庫、1999 年）があり、岩根氏が執筆した研究書として『贋作ドン・キホーテ』（中公新書、1997 年）を挙げることができる。また、岩根氏が『ドン・キホーテ』とその作者であるミゲル・デ・セルバンテス（1547 年－1616 年）に言及した著作に、『物語 スペインの歴史』（中公新書、2002 年）と『物語 スペインの歴史 人物篇』（中公新書、2004 年）そして『スペイン無敵艦隊の悲劇』（彩流社、2015 年）があることも看過するわけにはいかない。

本書において岩根氏はアベリャネーダ作の『贋作ドン・キホーテ』を詳述している。岩根氏は「詳細については『贋作ドン・キホーテ』（中公新書）に詳しく述べているので重複は避けねばならない」（p. 41）と記した上で、セルバンテス作の『ドン・キホーテ』とアベリャネーダ作の『贋作ドン・キホーテ』（1614 年）との比較分析を見事に展開させている。岩根氏は両作品の根本的差異を以下のように簡潔に記している。「巨人といてこんで風車にぶつかっていくドン・キホーテを知らない人はいない。しかし風車に突撃しないドン・キホーテのあることを知る人は少ない」（p. 229）。マルティン・デ・リケールの唱える〈贋作の作者アベリャネーダ＝ヘロニモ・パサモンテ〉説を概説しながら、岩根氏は両作品に見受けられる形式的及び内容的差異を読者に的確に伝えることに成功している。

興味深いのは、岩根氏が作品世界内においてドン・キホーテの所有した蔵書をめぐって数量的分析を進展させている点である。ドン・キホーテが所蔵した書物に関して、岩根氏は以下のように記述している。「それにしても都会の大貴族の所蔵が 500 冊もあれば記録的な数で

ある時代に、ラ・マンチャの片田舎の貧乏郷土が 100 冊以上もの騎士道物語を自宅に所蔵しているのは画期的に驚くべき数字であることが分かる」(p. 109)。ドン・キホーテが所蔵した書物に注目してその数を特定しようとする意欲的な姿に、多くの翻訳書と研究書を出版してきた岩根氏のスペイン文学研究者としての矜持が窺える。

『バロック演劇名作集』(国書刊行会、1994 年)の訳者(もうひとりの訳者は佐竹謙一氏)としても知られる岩根氏は、セルバンテスが生きた時代の演劇事情に目を配ることも忘れず、次のように書いている。「スペイン人の芝居好きは有名で日替わりで演題が変わった。平土間の立ち見席であれば格安の木戸銭で入れたので毎日のように通いつめる芝居巧者がいてこれをモスケテロと呼んだ」(p. 124)。スペイン黄金世紀の大衆演劇をめぐるこの記述に、岩根氏のスペイン黄金世紀演劇研究者としての面影を見てとれる。

また、岩根氏は後篇第 29 章で展開される「魔法の小舟の冒険」に登場する水車の存在も重要視し、前篇第 8 章における有名な「風車の冒険」と対照化させて次のように論じている。『『ドン・キホーテ』を語るときわずか 1 ページ足らずの風車の冒険には必ず言及されるが、それよりはるかに危険な、あやうく命を落とすところだった水車の冒険にはほとんど関心が払われない。巨人を風車と見るのが笑うべき狂気なら水車を城砦と見るのも狂気である。ましてや甲冑に身を固めているドン・キホーテにとって水難ははるかに命がけの危険な冒険であったはずである」(p. 198)。このように岩根氏は「風車の冒険」ばかりが目目される『ドン・キホーテ』の定型化された視覚像と一旦、距離を置き、別の角度から「魔法の小舟の冒険」すなわち、「水車の冒険」も注視するよう読者に呼びかけながら、従来の『ドン・キホーテ』像に纏わるイメージ批判を巧みにおこなっている。

出色なのは「第 9 章 ドン・キホーテの衣服」である。岩根氏は同章において、ドン・キホーテが身に着けていた衣服の視覚的様相を以下のように推論している。「ラ・マンチャの片隅に暮らしているドン・キホーテは、おそらく平日はこの裕福な平民と似たり寄ったりの茶色地の上着を常用しているが、祭日ともなると一張羅の黒っぽい上質の上着を着用していたのではないかと想像される」(p. 212)。岩根氏が『ドン・キホーテのスペイン社会史』において論述している内容は「知られざる『ドン・キホーテ』の背景史」と捉えることもできる。岩根氏がこれまで上梓してきた数々の研究書の内容を集大成して出版した本書は日本における『ドン・キホーテ』研究の新しい地平を切り拓いた必読書として後世に残り、『ドン・キホーテ』研究を志す若者たちが手にとる書物となることであろう。

(こさか・ともひろ 南山大学准教授)

【書評 4】

パウリーナ・フローレス『恥さらし』

(松本健二訳、白水社、2021 年)

安原 瑛治

本書は、チリの新進作家による短編集である。処女作でありながら、たいへんな人気をおさめ 2016 年度の「エル・パイス」紙による年間ベストテンにランクインした。訳者解説によれば、近年のスペイン語圏では女性作家の活躍がめざましいというが、そうした動向を知る

うえでも、適した一冊である。

本書には九つの物語が収録されているが、作家が描こうとしているものはかなり共通している。いずれも舞台はチリで、基本的に主人公は 1990 年代を生きる 10 歳前後の子どもか、2010 年代を生きる 20 代の若者である。前者によって民政移管後の社会の閉塞感がおぼろげに仄めかされ、後者によって、その閉塞感がのびのびとした日常として語られる。たとえば、「タルカワーノ」では、地方都市で教会から楽器を盗もうとする幼い少年が、失職した元軍人の父親の傷ついた自尊心をかいま見、自分を取りまく過酷な現実に対峙する。一方、「ナナおばさん」の主人公は、風変わりな親戚との交感を回想しながら、当時（1990 年代）の自分にはあった希望がついてたことを認める。いいかえれば、これらふたつの時代は、目覚めと諦念に対応している。

また、これらの時代のあいだに、頻繁に逃亡のモチーフが描かれている点も興味深い。事実、フローレスの描く少年少女は、現実を知ったあとで家出をし、それを経て 2010 年代に流れこむ場合が多い。現実からの逃避とその後の諦念が描かれる「タルカワーノ」、「ナナおばさん」、「最後の休暇」は、この系譜にあたる。しかし、重要なのは、『恥さらし』が逃避と諦念にとどまる作品ではない、ということである。本書において画期をなすのは、末尾におかれた「よかったね、わたし」である。1990 年代の少女（ニコル）が友人との交流から階級社会を見出す物語と、停滞した現代をいきる主人公（デニス）が国営団地の不倫に手を貸す物語が交叉するこの短編は、すぐれてフローレス的であるといえるが、上にみた典型からは外れている。それがわかるのが結末である。写真家になる夢にみきりをつけたデニスは、可もなく不可もない自らの人生を「よかったね」と追認したあと、「パソコンのスイッチを入れ、ベッドに身を投げ」（p. 261）、周囲の気配に耳をすませる。物語はふいに終わるためあととは読者の想像にゆだねられるが、ここで示されるのは、マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』や、ロレンス・ダレル『アレクサンドリア四重奏』に通じる、靈感に身構える作家のすがたであると解釈できる。つまり、現実には倦いたデニスは、フィクションというもうひとつの現実を見出したのである。

その意味で、『恥さらし』は、芸術と現実の関係を考察した古典につらなる、すぐれて「文学的な」作品である。くわえて、それは、「ラテンアメリカ」を寓話的に定義しようとした〈ブーム世代〉の小説とはべつな仕方その現実と切り結んだ、すぐれて「ラテンアメリカ的な」作品でもある。それでは、ここで「見出された時」は、これからいかに展開されるのだろうか。読者にはまたひとつ愉しみがのこされた。

（やすはら・えいじ 東京大学大学院博士課程）

【新刊書紹介】

ラテンアメリカ文化事典編集委員会（編）『ラテンアメリカ文化事典』
（丸善出版、2021 年）

鼓 宗

子どもの頃に「ものを調べる」といえば、二、三十巻がずらっと揃う百科事典に当たると同義であったように記憶している。けれども、マッキントッシュや Windows95 とともにパソコンが家のなかに入ってくるようになると、その代表的な存在のように思っていた『世界大

百科事典』(平凡社)や『ブリタニカ百科事典』(TBS ブリタニカ)も CD-ROM などの電子版の普及が進んで、かつて応接間を飾ったような紙媒体の立派なセットは姿を消してしまった。わが身を顧みても、手元に置いたのは古書で求めれば高い買い物ではなくなっていたそうした事典ではなく、HDD に収めてしまえる『Encarta 総合大百科』(Microsoft)だった。

知を集積し編纂するには時間もお金もかかるのはご承知のとおりで、電子化された百科事典はゼロ年代には完全にオンライン化に経済上の解決策を見出しているようだが、そのような時代に紙媒体の事典を企画し出版する苦労は、百科ではない主題が特化された事典であってもおそらく変わることなく、発行する出版社にとって並大抵のものでないに相違ない。

これまで、わたしたちが研究対象にする地域についての手に取りやすい日本語のレファレンスブックとして、平凡社のスペインとラテンアメリカの両『知る事典』や明石書店の『エリア・スタディーズ』、さらには丸善出版の『スペイン文化事典』が重宝されてきたが、2021年2月、この文化事典のシリーズに『ラテンアメリカ文化事典』が加わった。『スペイン〜』の刊行から10年、ことに紙媒体における厳しい昨今の出版事情にあって、大西洋を挟む両地域の版がそろったのは、自身も編集に関わった書物ながら喜ばしいことだと思う。

恩師のひとり染田秀藤先生から、国立民族学博物館の関雄二先生を中心にこの『ラテンアメリカ文化事典』の準備が進んでいるとうかがったのは、確か2017年の年末であった。その頃にはもう、領域ごとの各章に各国情報と年表の付録という体裁が決まっていたのだろう。

序論の「ラテンアメリカとは」をはじめ17ある章の各々は、20前後の項目とコラムから成り立っている。400ほどの入り口があるわけだが、巻頭で関先生が仰っているように、いくつもの歴史や言語や文化によってかたち作られるラテンアメリカの全体像を描くのが容易な業でないことは言うまでもない。けれども、多様な領域を専門とする200名を超える執筆者によって2ページの見開きからなる各項目が、必要な基本的事実を客観的に伝えながらも、それぞれの書き手がこの地域の研究に対して抱く情熱を反映したエッセイのごとき妙味のあるものに仕立てられているおかげで、項目から項目へと行き来したり読み物のように読み進めたりしているうちに、ラテンアメリカというわたしたちが常に知り分かりたいと望んでいる対象が、複眼的視点からの新しい像を結んで姿を現す。

担当させてもらった「文学・思想」の章では、お一人おひとりの名前を挙げることは控えるけれども、柳原孝敦先生をはじめ多くの方々が愛情と造詣を傾けてこの領域のプリズムの一面一面を削り出し、磨き上げてくださった。それはほかのどの章でも同じで、ラテンアメリカの人を、土を愛する声の糸が縫り合わされていて、そこには光を通す隙間もあるとしても、温もりのある手でしっかりと刻まれた塑像のシルエットが浮かび上がる。

この世紀になってから電子化された情報は驚くほどに増えて、検索をかけると瞬時に、かつてなら簡単に知り得なかった一次情報にさえも触れられる。しかし、そのような情報の海を、羅針盤を読み海図でもって確かめる航海士の導きなしに渡れば、それは多くの人にとって困難な航海となる。そのような時、このたびの『ラテンアメリカ文化事典』のような事典が多くの読者にとって行くべき先を照らし、頼れる灯りとなると期待したい。700ページを超す紙の書物は重い、それが持つ意義はきっとさらに重い。

(つづみ・しゅう 関西大学外国語学部教授)

【国際研究プロジェクト案内】

キャラバンは進む ―国際研究プロジェクト『ダリーオ十年紀』(AR.DOC)の現在

棚瀬 あずさ

2016年に発行された日本イスパニヤ学会会報23号に、「国際研究プロジェクト『ダリーオ十年紀』：情報通信技術時代の文献学の挑戦」という短い記事を書いた。詩人ルベン・ダリーオの没後百年を記念して、ブエノスアイレスのトレス・デ・フェブレロ国立大学(UNTREF)がスペイン語圏内外の研究者たちとともに立ちあげた、ダリーオ全集の刊行と、書籍、新聞記事、手稿などさまざまなかたちでのこの彼の著作や書簡等の資料を集約するデジタルアーカイブの作成をめざすプロジェクトを紹介する文章である。当時マドリードでダリーオの詩論に関する博士論文を執筆中であった筆者は、プロジェクトの協力者としていまも微力ながら調査に加わっており、UNTREFからは、ぜひ日本でもプロジェクトのことを広めてほしい、と熱のこもった連絡をたびたび受けている。最近全集の初めての巻を手にとることができたので、プロジェクトの状況報告と書評を兼ねて、ふたたびここに記事を寄せることにした。

ダリーオは10代で母国ニカラグアを離れ、ブエノスアイレス、パリ、マドリードをはじめ、いくつもの地へ居を移しながら過ごした。ブエノスアイレスで詩集『瀆神の聖歌』*Prosas profanas*を発表した1890年代からは、モデルニスモの領袖として全スペイン語圏に名を馳せるようになったが、その生活を主に支えたのは詩ではなく、新聞や雑誌に送ったクロニカの手稿料である。クロニカのうち、ダリーオの存命中に書籍にまとめられ出版されたものは一部である。このため、会報23号でも触れたように、媒体も刊行地もばらばらの彼の著作が各地のアーカイブに散らばっており、その全貌をとらえることは従来非常に難しい状況にあった。これまでに『全集』*Obras completas*の名で刊行された四つの作品集は、このような資料の分散のために、現在把握されているダリーオの作品の6割程度しか収めていない。したがって、彼の作品をひろく読もうとするなら、『全集』以後のアーカイブ調査から作られたクロニカ集など、入手困難なことも多いいくつもの版を参照する必要がある。さらに、主要な詩集(『青』*Azul...*、『瀆神の聖歌』、『生命と希望の歌』*Cantos de vida y esperanza*)の批判校訂版を除けば、上に挙げた『全集』を含めて、ダリーオの没後にまとめられた作品集は、総じてあいまいな校訂の基準に依っており、誤植やデータの間違いといったごく基本的な問題も多く含む。

散在する資料の集約と、文献学的厳密さを備えた作品全集の編纂、という二つの課題にも取り組むのが、UNTREFのプロジェクトである。デジタルアーカイブは、Archivo Rubén Darío Ordenado y Centralizado、通称 AR.DOC としてウェブ上に公開されており(<http://archivoiac.untref.edu.ar/index.php/rub-n-dar-o>)、この5年間で、ダリーオの作品集の初版、ブエノスアイレスの『ラ・ナシオン』*La Nación*紙に寄稿された全697本のクロニカの複写、Mundo Latino 版全集(1917年—1919年)とAfrodisio Aguado 版全集(1950年—1955年)などが追加された。全集の編纂に関しては、構成の検討に時間がかかったが、最終的には、作品を発表時期にしたがって全10巻 tomo に分け、さらにその下位区分として、生前の書籍ごとにまとめた分冊 volumen を設けることに決まった(詳しくは、“*Década dariana - Boletín informativo número 3*”でウェブ検索すると出てくる資料を参照のこと)。このたび刊行されたのは6巻1冊にあたるクロニカ集『キャラバンは進む』*La caravana pasa*で、ほかには、9巻3冊の自伝と、7巻2冊のクロニカ集『所見集』*Opiniones*、5巻2冊のクロニカ集『聖地遍歴』

Peregrinaciones が近刊予定である。会報 23 号の記事の題にあるとおり、当初このプロジェクトは「ダリーオ十年紀」*Década dariana* という名前で 10 年間のプロジェクトとして提案されていたが、いまはアーカイブの名称である AR.DOC のほうが、プロジェクトそのものの名前として定着しているように思う（とても 10 年では済まないことを誰しも悟ったからだろうか）。2017 年以降は、Latin American Studies Association の毎年の大会において、AR.DOC の進捗状況と問題点を共有し議論するワークショップが開かれてきた。

率直に言うと、今回ギュンター・シュミガレ Günther Schmigalle の編による『キャラバンは進む』*La caravana pasa* (Sáenz Peña: Universidad Nacional de Tres de Febrero, 2019) を入手するまで、AR.DOC の成果がどのようなものになるのか、頓挫することにならないか、なかば不安だった。しかし、いまはこれから全集を一冊ずつ揃えていくことが楽しみである。『キャラバンは進む』は、1902 年にパリの Garnier Hermanos 社から出版された作品集で、ダリーオが 1901 年と 1902 年に『ラ・ナシオン』に寄せたクロニカから選ばれた 35 篇によって構成されている。編者シュミガレはこれまでもダリーオのクロニカの調査と刊行に精力的に携わってきたドイツ人研究者であり、『キャラバンは進む』については、2000 年から 2005 年にかけて、ベルリンの Tranvía 社から全 4 巻の批判校訂版を上梓した。新しい AR.DOC 版は、この Tranvía 版を下敷きにして作られたものである。ダリーオのクロニカは、概して芸術や社会情勢をめぐる同時期の具体的な事件や論題を念頭に置いて書かれ、第三者の言葉の引用や間接的言及を数多く含む。したがって、そのていねいな読解には、背景にある出来事、出典、仄めかしの対象をつきとめ、文章を取りまく間テクスト的な網目を回復する作業が欠かせない。シュミガレによって付された註釈は、読者が必要とするこのような情報の提示においてまったく抜かりがない。全 456 ページのうち 102 ページを占める後註のなかで、シュミガレは本文に言及のある人名や事柄に関して文脈に即した詳しい解説をつけ、引用部分には出典を記し（不明なものについてはその旨を明記している）、ダリーオ自身のほかの作品、あるいは当時のほかの書き手による書物や新聞記事に本文の理解を助ける記述が見つかる場合には、それらまでも示している。いったいどれほどの熱意で、どれほど多くの時間を費やしたのだろうかと思わされる緻密な仕事の大半は Tranvía 版に由来するものだが、AR.DOC 版においてはさらなる文献調査の成果が諸方に追記された。そして、重要なことだが、AR.DOC 版においては、テキストが明快かつ適切な基準に則って校訂され、研究者にとってきわめて利用しやすいものとなった。本文では 1902 年の初版が古い正書法に基づく綴りや誤植も含めて忠実に写され、誤植と考えられる箇所はその旨が角括弧で記されている。また、脚註によって、『ラ・ナシオン』版における異文がすべて示されている。以上のような註解の細やかさと校訂の明瞭さは、全集のほかの巻においても踏襲されるはずである。つぎに刊行される予定である 9 巻 3 冊は、Modern Language Association の Committee on Scholarly Editions (MLA-CSE) による学術書の審査に合格した CSE Approved Edition となることが決まったという。

1898 年の末に『ラ・ナシオン』の特派員としてスペインに渡ったダリーオは、1900 年の万博以降はパリに住み、現地の文化や社会に関する所感をクロニカを通じて大西洋のむこうの読者に書き送った。『キャラバンは進む』における筆致は、憧れの地を前にした夢見がちな若者のそれではもはやなく、華やかな都市のはらむ虚栄や欺瞞を、皮肉やユーモアをまじえて淡々ととらえる。流行りものを除いて外国の文化に関心を持たず、中南米の文学など「ほぼフォークロアに属するような事柄」“el asunto casi como perteneciente al folk-lore” (p. 162) だと考えているパリの知識人のあり方に不満を漏らす。ヨーロッパ諸国の関係を静かに見つめ、

加熱する帝国主義がいずれもたらすカタストロフィの兆しを感じ取る。未知の領域に挑む科学技術の試みには、感嘆しながらも怯えてこう述べる。「スフィンクスは簡単には打ち負かせない」“la esfinge, no se deja vencer fácilmente” (p. 178)。テーマは、例えば医学生たちが解剖した遺体にふざけて古新聞を詰めこんだというような、当時のメディアで話題になったパリの変わった事件に関することから、ロンドンやベルギーへの旅行記、パナマ運河をめぐる政治状況やフランスにおける信仰の状況についての考察、美術展批評など手広い。必要に駆られ急いで書かれたものも多いのだろう、各篇の構成は必ずしも論理的に整えられておらず、雑感の趣もある。とはいえ、そこに散りばめられたダリーオ自身の体験や、見聞きしたものである無数の挿話は、彼が日々執筆の題材を集め、思索しつづけたさまをあきらかにする。

美術展批評のひとつでは、ダリーオは前置きにこう書いている。「14 年間前から『ラ・ナシオン』で私の記事を読んでいる諸君なら知っているこの誠実さで、私は見たものを、見たまま、感じたままに述べ、伝える」“Digo y comunico lo que veo, tal como lo veo, tal como lo siento, con la sinceridad que me conocéis los que, desde hace catorce años, me habéis leído en *La Nación*” (p. 238)。「誠実さ」は、名声の高まりとともに苛烈な批判を浴びることも増えていった彼が、このころから弁明において使うようになった表現であり、じつは作品集の表題の「キャラバンは進む」という一見不可解なフレーズとも響きあっている。シュミガレが序文に記しているとおり、これはジャン・リシュパンが詩集『乞食たちの歌』*La chanson des gueux* の序文に引いた「犬が吠えてもキャラバンは進む」“Le chien aboie, mais la caravane passe”というトルコの諺から取ったものだといわれている (pp. 17-18)。ダリーオは、周囲の無理解やいわれのない非難をよそに泰然と歩みを進めることの譬えとしてこのフレーズを気に入り、1905 年の詩集『生命と希望の歌』の冒頭では、みずからの来歴を振りかえりながらあらためて詩人としての志をあらわす詩を、つぎの一連で締めくくることになった。

La virtud está en ser tranquilo y fuerte;
Con el fuego interior todo se abrasa;
Se triunfa del rencor y de la muerte,
Y hacia Belén... ¡la caravana pasa!

美德とはこころおだやかに、そして強くあること。
内なる炎ですべては焼き尽くされる。
恨めしさと死とは打ちやぶられ、
ベツレヘムへ向かって……キャラバンは進む！

AR.DOC 版の *La caravana pasa* は、Librería Waldhuter (<http://www.waldhuter.com.ar/libreria>) から購入することができる。

(たなせ・あずさ 日本学術振興会特別研究員 PD)

【新刊案内】

2020年6月から2021年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏があるかもしれません。ご教示願います。

- 『セレスティーナ ―カリストとメリベアの悲喜劇』、フェルナンド・デ・ロハス、岡村一（訳）、水声社、2020年6月
- 『犬売ります』《フィクションの楽しみ》、フアン・パブロ・ビジャロボス、平田渡（訳）、水声社、2020年6月
- 『吐き気』《フィクションのエル・ドラード》、オラシオ・カステジャーノス・モヤ、浜田和範（訳）、水声社、2020年6月
- 『言葉の守り人』、ホルヘ・ミゲル・ココム・ベッチ、吉田栄人（訳）、国書刊行会、2020年6月
- 『カリブに生きる：文献から辿る小地域の人びとの豊かな遺産』、三石庸子、東洋大学出版会、2020年6月
- 『わたしはフリーダカーロ：絵でたどるその人生』、マリア・ヘッセ、宇野和美（訳）、花伝社、2020年6月
- 『天使のいる廃墟』、フリオ・ホセ・オールドバス、白井貴子（訳）、東京創元社、2020年6月
- 『スペイン語で愛でる万葉集』、伊藤昌輝（訳・注）、エレナ・ガジェゴ（監修）、大盛堂書房、2020年7月
- 『スペイン市民戦争とアジア ―遥かなる自由と理想のために―』（KUP選書1）、石川捷治・中村尚樹、九州大学出版会、2020年8月
- 『知られざる福島移民 キューバ・ハワイ・ペルー・カナダ』、紺野滋、歴史春秋社、2020年8月
- 『夜の舞・解毒草』、イサアク・エサウ・カリージョ・カン／アナ・パトリシア・マルティネス・フチン、吉田栄人（訳）、国書刊行会、2020年8月
- 『メキシコ 2018～19年：新自由主義体制の変革に挑む政権の成立』、国本伊代、新評論、2020年9月
- 『フェリペ2世：スペイン帝国のカトリック王』（世界史リブレット人）、立石博高、山川出版社、2020年9月
- 『外交回想録 ―竹下外交・ペルー日本大使公邸占拠事件・朝鮮半島問題』、寺田輝介（著）、服部龍二・若月秀和・庄司貴由（編）、吉田書店、2020年9月
- 『ボスの影』（ルリユール叢書）、マルティン・ルイス・グスマン、寺尾隆吉（訳）、幻戯書房、2020年9月
- 『炎の人ペルー日系人 加藤マヌエル神父』、大塚文平（著）、クレアリー寛子（編修）、日相出版、2020年10月
- 『アルマの名前がながいわけ』、フアナ・マルティネス・ニール、宇野和美（訳）、ゴブリン書房、2020年10月
- 『しあわせなときの地図』、フラン・ヌニョ、ズザンナ・セレイ（絵）、宇野和美（訳）、ほるぷ出版、2020年10月
- 『エクソダス：アメリカ国境の狂気と祈り』、村山祐介、新潮社、2020年10月
- 『ドン・キホーテのスペイン社会史 ―黄金時代の生活と文化』、岩根罔和、彩流社、2020年11月
- 『きらめく共和国』、アンドレス・バルバ、宇野和美（訳）、東京創元社、2020年11月
- 『歴史のなかのスペイン ―キリスト教徒、モーロ人、ユダヤ人』、アメリコ・カストロ、

- 本田誠二（訳）、水声社、2020 年 12 月
- 『メソアメリカ文明ゼミナール』、伊藤伸幸（監修）、嘉幡茂・村上達也（編集）、勉誠出版、2020 年 12 月
 - 『スペイン 都市の詩学』（南山大学学術叢書）、小阪知弘、国書刊行会、2020 年 12 月
 - 『増補 エル・チチョンの怒り：メキシコ近代とインディオの村』（岩波現代文庫）、清水透、2020 年 12 月
 - 『古代マヤ文明 一栄華と衰亡の 3000 年』（中公新書）、鈴木真太郎、中央公論新社、2020 年 12 月
 - 『ロマンス語比較辞典』、伊藤太吾、大学書林、2020 年 12 月
 - 『ベネズエラ 一溶解する民主主義、破綻する経済』（中公選書）、坂口安紀、中央公論新社、2021 年 1 月
 - 『恥さらし』（エクス・リブリス）、パウリーナ・フローレス、松本健二（訳）、白水社、2021 年 1 月
 - 『混迷の国ベネズエラ潜入記』（わたしの旅ブックス）、北澤豊雄、産業編集センター、2021 年 1 月
 - 『未完の多文化主義：アメリカにおける人種、国家、多様性』、南川文里、東京大学出版会、2021 年 1 月
 - 『詳しく学ぶカタルーニャ語文法』、田澤耕、白水社、2021 年 2 月
 - 『ミランダ語が生まれたとき 一ポルトガル・スペイン辺境における言語復興史』、寺尾智史、三重大学出版会、2021 年 2 月
 - 『ラテンアメリカ文化事典』、ラテンアメリカ文化事典編集委員会（編）、丸善出版、2021 年 2 月
 - 『ラテンアメリカ 地球規模課題の実践』、畑恵子・浦部浩之（編）、新評論、2021 年 2 月
 - 『エル・グレコ祭壇画物語』、西川和子、彩流社、2021 年 2 月
 - 『見知らぬ友』（世界傑作童話シリーズ）、マルセロ・ビルマヘール（著）、オーガフミヒロ（絵）、宇野和美（訳）、福音館書店、2021 年 2 月
 - 『帝国の動向』《フィクションのエル・ドラード》、フェルナンド・デル・パソ、寺尾隆吉（訳）、水声社、2021 年 2 月
 - 『おばあちゃん、青い自転車で世界に出逢う』、ガブリ・ローデナス、宮崎真紀（訳）、小学館、2021 年 2 月
 - 『国際政治のなかの中南米史：実体験を通してリアリズムで読む』、渡邊利夫、彩流社、2021 年 2 月
 - 『碧きキューバ』、内藤聡介、青菁社、2021 年 2 月
 - 『混迷するベネズエラ 一21 世紀ラテンアメリカの政治・社会状況』、住田育法・牛島万、明石書店、2021 年 3 月
 - 『一冊でわかるスペイン史』、永田智成・久木正雄（編著）、河出書房新社、2021 年 3 月
 - 『よみがえる天才6 ガウディ』（ちくまプリマー新書）、鳥居徳敏、筑摩書房、2021 年 3 月
 - 『越えていく人 一南米、日系の若者たちをたずねて』、神里雄大、亜紀書房、2021 年 3 月
 - 『タンゴの真実』、小松亮太、旬報社、2021 年 3 月
 - 『クルドの夢 ペルーの家 一日本に暮らす難民・移民と入管制度』（論創ノンフィクション）、乾英理子、論創社、2021 年 4 月

- 『スペイン 歴史という今』、河村雅隆、文芸社、2021 年 4 月
- 『祖国（上）／（下）』、フェルナンド・アラムブル、木村裕美（訳）、河出書房新社、2021 年 4 月
- 『英雄たちの夢』《フィクションのエル・ドラード》、アドルフォ・ビオイ・カサーレス、大西亮（訳）、水声社、2021 年 4 月
- 『ニューエクスプレスプラス カタルーニャ語《CD 付》』、田澤耕、白水社、2021 年 5 月
- 『ある無名兵士の変遷』（インディアス群書 15）、ルルヒオ・ガビラン、黒宮亜紀（訳）、現代企画室、2021 年 5 月
- 『世界の美しい民藝 アジア、アフリカ、中南米、巧藝舎のコレクション 320 点』、巧藝舎、グラフィック社、2021 年 5 月

【2021 年度日本イスパニヤ学会奨励賞】

2021 年 7 月 25 日に開催された日本イスパニヤ学会理事会において、豊平太郎氏の論文「大衆の反逆としての芸術の脱人間化——「大衆-人」の時間構造の観点から」が高く評価され、2021 年度日本イスパニヤ学会奨励賞の授与が決定しました。

【『HISPÁNICA』編集委員会より】

『HISPÁNICA』第 66 号の原稿を募集しています。論文・研究ノート・書評を投稿規定に準い、2022 年 3 月 1 日から 31 日（31 日消印有効）の期間内にご投稿ください。

（送付先）日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-24-1-4F

（株）ガリレオ 学会業務情報化センター内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

【編集後記】

会報 28 号をお届けします。例年以上に多くの原稿をお寄せいただきました。投稿者のみなさまには心よりお礼申し上げます。

今号にも追悼文が掲載されています。世の趨勢に従い、年々物故会員も多くなっています。スペイン語やスペイン語圏の研究、そしてスペイン語教育に多大なご事績を残された先輩諸先生方の学恩を改めて想起するとともに、今後の研究・教育活動への貢献をお誓い申し上げたいものです。

昨春コロナ感染が広がり始めたころには想像もしていなかったことですが、今年度はコロナ禍もまる 2 年を迎えようとしています。この間、研究・教育活動において様々な困難があった一方、新たな工夫やアイデアも生まれました。本会の年次大会も 2 年連続でオンライン開催となりました。Zoom 開催によって居住地による参加への障害がなくなったなど利点もある一方、直接対面しての議論や意見交換の機会が失われたことも否めません。会報が少しでも会員のみなさまの学術的コミュニケーションの場、契機になれば幸いです。

（広報委員長 仲井邦佳）